

皇室とも縁のある分野で、その「道」を究めようと歩み続ける女性たちがいる。突き動かしている源泉は何か。県内で取材した。

## 歩み続ける 平成から令和へ

—1

### 久保 郁さん (三島・神経科学者)

見ると、眼球がともに動くという。この「行動」の最中に活動している神経細胞を、久保さんは世界で初めて観察した。

2013年、留学中のドイツ。暗闇の研究室で顕微鏡モニターに目を凝らした。「光った」。光ることは活動している証し。脳の部位、視蓋前野（しがいせんや）が視覚情報を感じずることを、細胞レベルで特定した。動きの方向を区別する細胞も特定した。観察には、ノーベル賞受賞の手法などを駆使。「チームとして成果を上げる」意義も知った。

「でも、満足はしていない

い」。神経細胞の「先」が分からなからだ。脳のどの領域とつながるのか、配線図を調べ、情報処理機構の全容を解明したい。

科学の道に進んだのは、高校で生物の世界に魅せられたから。特にチンパンジーやサルに熱中した。ヒト

とは遺伝子情報で2%の差異にもかかわらず、「できること」が違ふ。霊長類研究で有名な京都大に進み、「言語や道具を使う、ヒト

の複雑な行動の源を知りたい」と脳に着目した。天皇陛下が、「科学者」であることに神経科学者と

して関心を寄せる。「科学とは好奇心を持ち、解き明かすこと。二つのステップがある」と指摘し、ヒトでなければ成せないという。「陛下が」育った環境は、

私たちが異なっても、ステップを同じくして科学に没頭されている。科学は人類共通の関心事だと実感する」と語る。

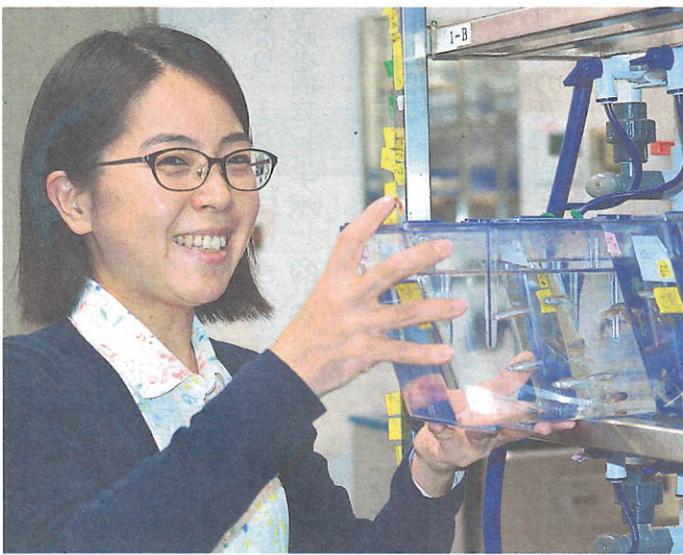
保育園に通う一児の母。研究と家庭の両立に切り替えは必須だが、「帰宅すればせざるを得ない」と笑う久保さん。「ゼブラフィッシュの可能性はすごい。私はもっともつと脳が見たい」

皇室と科学、天皇陛下は八七類の分類を研究し、日本魚類学会会員。科学の進歩に顕著な貢献のあった元首に贈られる英国王立協会の「チャールズ二世メダル」初受賞者でもある。

皇室と科学、天皇陛下は八七類の分類を研究し、日本魚類学会会員。科学の進歩に顕著な貢献のあった元首に贈られる英国王立協会の「チャールズ二世メダル」初受賞者でもある。

イッシュ。稚魚は体が透明で、約4ミと小さく、脳内の神経細胞も約10万個と少ない。「シンプルな脳」はヒトではできない、直接観察を可能にする。ゼブラフィッシュは視覚を基に行動することでも知られる。流れる景色を目で

# 脳内観察、二つの心で



久保郁さんが同僚とともに大切に飼育している「ゼブラフィッシュ」＝3月上旬、三島市の国立遺伝学研究所